



## アメリカ

## ダークチョコレートに含まれる重金属

- CR (Consumer Reports) ウェブサイト <https://www.consumerreports.org/health/food-safety/lead-and-cadmium-in-dark-chocolate-a8480295550/>
- AYS (AS YOU SOW) ウェブサイト <https://www.asyousow.org/blog/2022/8/17/new-report-explains-simple-safe-and-low-cost-solutions-to-reduce-levels-of-lead-and-cadmium-in-chocolate>

チョコレートは多くの人に好まれ、最近では、抗酸化物質が多く健康によいといわれるカカオ分の割合が高いダークチョコレートが人気だ。しかし、CRの商品テストでは、28銘柄のうち23銘柄に通常1回に食べる量(1オンス=約30g)の中にカリフォルニア州基準のMADL(最大許容摂取量/日)を超えるカドミウムと鉛のいずれか、または両方が含まれていた。直ちに健康被害が生じる量ではないが、カドミウムの多量摂取は重篤な腎機能障害を起こす。鉛は、高血圧や免疫抑制、神経障害、生殖機能障害、脳の発達阻害などを招く。

環境とCSR(企業の社会的責任)に注目するNPOのAYSが行ったカカオの重金属汚染の調査研究によると、土壌中のカドミウムをカカオの樹が吸収し徐々に種子のカカオ豆に蓄積し、鉛はカカオ豆収穫後に

発酵や天日乾燥時、輸送中に大気中の鉛を含む排ガス、有鉛塗料を含むごみ焼却のばい煙、<sup>ふんじん</sup>粉塵により汚染されることが明らかになった。カドミウム汚染の防止には、カカオ栽培地の土壌の転換・改良や若木への植え替えなどが効果的という。実際、CRの商品テストでカドミウムが低レベルだった銘柄には土壌のよい栽培地の豆をブレンドすることで汚染度を下げたものもある。一方、鉛汚染は、作業中や輸送時の<sup>ぼうじん</sup>防塵や、洗浄の際に金属を探知し除去する技術の開発等、即効性のある対策が可能だ。

CRは、妊婦や幼児はダークチョコレートを食べないよう警告。それ以外の人々が安全に楽しむには重金属が低レベルのものをを選び、野菜などの食品にも微量の重金属が含まれているため、ダークチョコレートは、たまに食べる程度にするよう勧めている。



## イギリス

## 食料品等の単位価格表示の徹底を

- Which? ウェブサイト <https://www.which.co.uk/news/article/supermarket-pricing-review-launched-after-which-investigation-aNCrL3K9b4kt>
- CMA(競争・市場庁) ウェブサイト <https://www.gov.uk/government/news/cma-launches-grocery-unit-pricing-review-to-help-shoppers-spot-the-best-value-for-their-money>

生活費の高騰が続くなか、消費者は日常の買い物で少しでも安いものを求めている。だがWhich?の調査では、同じ炭酸飲料で缶入りとペットボトル入りの複数個パックやまとめ売りなどの値札を見て、単位価格表示(以下、単価表示)なしでどれが一番安いか即答できる消費者は3割以下だったという。

スーパーマーケット等(以下、スーパー)にはPMO 2004(2004年価格表示に関する命令)により、読みやすく、分かりやすく、明確な単価表示が義務づけられている。しかし、今回の調査で ● 特売品・見切り品や会員割引等に単価表示がない ● 数字がかすれたり隠れたりして読めない ● 同じ商品でも1個当たり、1kg当たりなど一貫性がないなど、多くの問題点が明らかになった。

Which?が2015年にスーパーの不明瞭な価格表

示についてスーパーコンプレイント(苦情申し立て)を提出した際、CMAは実態調査等を行い改善を勧告したが、法規制自体の改正はなかった。CMAは、消費者が価格を比較して自分に適した選択をするためには分かりやすい単価表示が重要であるとして、このほどスーパーおよびオンラインストアにおける食料雑貨類の単価表示について見直すため再調査すると発表した。今回の検討項目は ● 2015年のスーパーコンプレイントで特定された問題点は残っていないか ● 販売業者によるPMOの順守状況 ● 消費者の認識と単価表示の情報活用、としている。

「すべての人に手頃な価格の食べ物を」キャンペーンでスーパーに改善を求める署名活動を行うWhich?は、今回のCMAの再調査をタイムリーかつ重要であると歓迎している。



スイス

## アイブロウペンシルは格安品で十分

- Konsumenteninfo AG “K-Tipp” 2022年第14号  
<https://www.ktipp.ch/tests/produktetests/detail/artikeldetail/einige-augenbrauenstifte-kratzen-beim-schminken/>
- ドイツ商品テスト財団ウェブサイト <https://www.test.de/Augenbrauenstifte-im-Test-Acht-fuer-schoene-Augenbrauen-5933385-0/>

眉は顔の印象を決める大切なパーツである。眉の色・形を整える化粧品として、ペンシル型、パウダータイプ、リキッドタイプ等、さまざまなアイブロウ(眉墨)が市販されている。そこで、スイスの消費者情報誌“K-Tipp”は今回、ペンシル型のアイブロウ12商品(ブラウン系)を対象に、塗りやすさ、塗布の均一性、持ちのよさや安全性をテストした。

その結果、8商品が総合的に「よい」と評価された。そのうち僅差で最高点を獲得したのが、約7ユーロの商品だった。自然化粧品表示のある2商品(約3ユーロと約6ユーロ)が、これに続いた。高評価を得た商品の中には、1~2ユーロ台と、非常に安価なものも含まれていたのが特徴である。

安全性では、重金属の含有に焦点を当てた。その結果、微量の有害金属(ニッケル、ヒ素)が検出され

た2商品が減点対象となった。これらの金属は発がん性との関連性が指摘されており、EU化粧品規則では使用が禁止されている。ただし、化粧品製造の過程で原材料から製品に入り込む余地があるため、技術的に避けられない量の混入は許容される。スイスはEU非加盟国だが、基本的にはEU法と調和するよう、国内規制を行っている。

なお、今回テストした全商品がブラシ付きだったことから、ブラシの使い心地も試したところ、毛が硬すぎて不快という評価が続出したという。

自然なメイクに見せる秘訣は、自身の髪の色と同じ色、またはわずかに明るい色のアイブロウを選ぶことだという。髪より濃い色の商品を使うと、人工的な印象の眉になると注意を促す。



ドイツ

## 乳幼児には向かない米のスナック

- 『エコ・テスト』2022年11月号  
[https://www.oekotest.de/kinder-familie/Nichts-fuers-Kind-Krebseregendes-Arsen-in-Reiswaffeln-im-Test\\_13211\\_1.html](https://www.oekotest.de/kinder-familie/Nichts-fuers-Kind-Krebseregendes-Arsen-in-Reiswaffeln-im-Test_13211_1.html)

ドイツ人が真っ先に思いつく米料理といえば、牛乳、砂糖で煮たミルクライスだろう。昔ながらのデザートで、好みに応じてシナモンやチョコレートをかけて食べる。近時はデザート以外でも米を使う機会が増えたが、あくまでも料理の付け合わせと位置づけられている。米を多食する日本と異なるのは、公的機関等が「米を食べ過ぎないで」と度々注意喚起する点である。米には発がん物質のヒ素が含まれるからである\*。

このような背景から、『エコ・テスト』ではライスワッフルを対象に、ヒ素等の有害物質が含まれるかどうか度々テストしている。ライスワッフルとは、ポン菓子(膨らませた米)を薄い円筒状に成型したスナックで、味付けのないものから、塩味、チーズ味、

フルーツ味など種類も豊富である。乳幼児にも好まれていることから、今回、乳幼児(7~8カ月以上)向けの小さな形状の11商品をテストした。ただし、市販の乳幼児向け商品はフルーツ味が主流のため、味付けされていない商品子どもに食べさせたい親は、一般向けの商品を小さく割って与えることが想定される。そこで、年齢表示のない9商品も併せてテストした。

その結果、全商品から無機ヒ素が検出され、特に7商品(うち乳幼児向け2商品)の値は極めて高濃度だったという。ほかにも、かなりの商品からカドミウム、アクリルアミド、アフラトキシン等が検出された。そこで同誌は、乳幼児にライスワッフルを与える際は、頻度と量に注意するよう助言する。

\* 扱いが日本と異なるほかの食材の例として、ヨウ素(ヨード)を含む海藻がある。  
ウェブ版「国民生活」2020年10月号「海外ニュース」参照 [https://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-202010\\_09.pdf](https://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-202010_09.pdf)